

序章 歴史の転換点と未来学

テクノロジの指数関数的進歩と社会変革の渦中

私たちはいま歴史の転換点にいます。けれど、こうした言葉はあまりにも消費されすぎていて、どこか空々しく響いてしまうのも事実でしょう。ソーシャルメディア（SNS）のタイムラインには「人工知能（AI）によって仕事がなくなる」「人間は不要になる」といった刺激的な言説が飛び交い、メディアは新技術に熱狂しながらも、冷めた視線でその危険性を語り続けています。

私たちは熱狂と冷静の間で揺れ動きながら、実感なき未来の予兆に、うっすらとした不安を抱えて日々を過ごしているように思います。歴史の転換点とは言われるが、果たして本当の「その日」はいつやってくるのか？ 今日か、明日か、来月か、1年後か、あるいは数年後

か？——転換点という言葉が引き連れる具体性と、実際の日々の曖昧性が、多くの人々の未来に対する態度を宙吊りにしているように、私には感じられます。

そして、同時に、私はこうも思うのです。私たちはたしかに歴史の転換点にいる、けれども、すべての歴史は、唐突に顕在化するわけではないのだと。

歴史はつねに、想像力によって夢見られ、アルゴリズムによって準備され、その後はあたかも詰将棋のように、少しずつですが確実に、潜在的ではあるものの、必然に向かって突き進んでゆき、あるとき一気に「現実」へと質的変異するものです。それは潜在的ですがすべて依存関係のある現実の連続であり、たとえ多くの人の目には見えなくとも、そこには一つたりとも偶然の出来事はありません。

だから、つねに顕在化し続ける未来を見誤らぬよう、いま・目の前にあるこの場所で、未来がどのように語られ、識別され、目指されているのかを、しっかりと見届けながら評価し、私たちはどこへ行くこうとしているかを考え続ける必要があります。

LLM（大規模言語モデル）に代表されるAIはどんどん賢くなっていて、すでに私たちの仕事を手伝ってくれており、時には私たちよりも優れた判断をする可能性も出てきました。小説を書き、絵を描き、映像を生成し、プログラムや会計レポートや企業の中長期戦略も自動生成

する。実際、この原稿を執筆しているいまこの瞬間にも、AIは私の思考の整理を助け、資料の検索を効率化し、時には私が見落としていた論理の穴を指摘してくれている——まるで見えない共著者のように。その進化は、もはや直線的なものではなく、指数関数的と形容されるほど急加速しており、ほんの数年前には想像もできなかった能力を次々と獲得しています。チェスや囲碁で人間に勝利したことは遠い過去の出来事となり、いまやAIは複雑な科学的発見を助け、芸術作品を創造し、人間と自然な会話を交わすまでになっています。

他にも、バイオテクノロジーの進歩は、まるで生命の設計図を書き換えるかのように、病気の治療に新しい道を開いています。CRISPR-Cas9のような遺伝子編集技術は、遺伝性疾患の根本治療や新たながん治療法の開発に期待をもたらす一方で、デザインナーベビーのような倫理的懸念も提起します。あるいは、目に見えないほど小さな世界を扱うナノテクノロジーは、医療から材料科学、エネルギー分野に至るまで革新的な応用が期待され、地球を飛び出して宇宙へと活動の場を広げる宇宙開発は、民間企業の参入により新たな宇宙経済圏の創出さえ現実味を帯びてきました。少し前まではSF映画の中だけの話だと思っていたようなことが、次々と現実のものになりつつあります。これからのテクノロジーが、難病を克服し、地球規模の環境問題を解決し、これまでの人類が歴史上知るよしもなかった、まったく新しい世界を見せてく

れるかもしれませんが。

しかし、こうした進歩には大きな課題や懸念も含まれています。AIが進化すれば、これまで人間がしてきた多くの仕事が自動化され、大規模な失業や経済格差の拡大を引き起こすかもしれません。自律型致死兵器システム(LAWS)のような、人間が一切関わらずに攻撃を行うことができる兵器が生まれれば、戦争のあり方を一変させ、倫理的な制御が極めて困難な状況が生じるでしょう。

遺伝子を操作する技術は、病気の治療には役立つかもしれませんが、「優れた遺伝子を持つ人間」を選んでつくられるようになったら、優生思想の再来を招き、人間社会の多様性や平等の理念を根底から揺るがしかねません。私たちの普段の行動や考えが、知らないうちにデジタル技術で監視され、アルゴリズムによって格付けされる社会も、息苦しいものになりそうです。さらに、新しい技術が地球環境に予期せぬ負荷をかけたり、その恩恵を受けられる人とそうでない人の間でデジタルデバイドが深刻化したりすることも、見過ごせない問題です。

私はSF作家として、ITコンサルタントとして、あるいは大学講師として、こうしたリスクをはらんだ未来について、SF小説の執筆やリサーチ、未来思考シミュレーションなどのワークショップを通じて考えてきました。

そして、生成AIの登場以降、思考することそのものや、チームで何かを成し遂げるプロセスそのものがアウトソース可能になった現代において、ますますそうした活動の必要性を感じています。

予測困難な時代における「未来学」

テクノロジーの発展があまりにも速く進み、社会の仕組みもグローバル化と相互依存によってますます複雑化しています。それゆえ、現代において、未来がどうなるのかを正確に予測することは、かつてないほど困難になっています。これまでの経験や過去のデータに基づく線形的な予測モデルは、創発的で非連続的な変化や、「ブラックスワン」事象と呼ばれる予測もできない急激な質的な変化の前では、しばしば無力です。非線形の未来のリスクに対しては、私たちはまるで、海図もコンパスも持たずに、未知の荒波が待ち受ける大海原へ漕ぎ出しているようなものなのです。

何もかもが複雑に絡み合い、一寸先で何が起こるかわからない、「VUCA」と呼ばれる時代だからこそ、「未来学 (Futures Studies)」あるいは「フューチャロジー (Futurology)」と呼ばれる学際的な探求領域が、かつてないほど重要な意味を持ち始めていると私は思います。未来

学は、単に未来を「当てる」ことを目的とする占いや予言とは根本的に異なります。むしろ、未来学は、起こりうる複数の未来（オルタナティブ・フューチャー）を体系的に探求し、それらの未来が持つ意味や影響を分析し、その中から私たちが「望ましい」と考える未来（プリファラブル・フューチャー）を特定し、そしてその実現に向けて現在からどのような行動をとるべきかを構想するための知的な営みなのです。それは、未来に対する私たちの想像力を刺激し、受動的に未来を待つのではなく、能動的に未来を創造していくための思考の枠組みと方法論を提供してくれます。

現代の未来学は、未来を単一の決定されたものとしてではなく、可能性に満ちた開かれた空間として捉えます。そして、その空間の中で、私たちの価値観、選択、行動が、どのような未来の軌跡を描き出すのかを明らかにしようとします。それは、不確実性を前にして思考停止に陥るのではなく、むしろ不確実性を創造的な探求の出発点とするための知恵なのです。

一人ひとりが未来を考える土台をつくる

未来を正確に、立体的に捉えるということの重要性は高まり続けています。それにもかかわらず私たちの多くは奇妙なほど、未来を迎えるための準備ができていません。政治家は次の選

挙のことを考え、企業は四半期の業績に追われ、個人は日々の生活に忙殺されている間に、人類の運命を左右しかねない技術革新が、私たちの認識や議論を置き去りにして進行しています。さらに深刻なのは、私たちが未来について冷静に考え、建設的な対話を行うための土台そのものが、急速に侵食されていることです。SNSが生み出したアテンションエコノミーは、複雑な問題を単純化し、瞬間的な感情反応を煽ることで私たちの注意を奪い合っています。その結果、長期的思考や熟慮に基づく判断よりも、即座の「いいね」や「シェア」を獲得できる刺激的なコンテンツが優遇される構造が生まれました。アルゴリズムは私たちを快適な情報の「エコーチェンバー」(Echo Chamber)に閉じ込め、異なる意見や価値観との出会いの機会を奪っています。

この情報環境の歪みは、社会の分断をさらに加速させています。経済格差の拡大と相まって、排外主義的な感情が世界各地で高まり、「私たち」と「彼ら」を分ける境界線がますます明確になっていきます。グローバルな課題に対してこそ協力が必要な時代に、私たちは内向きになり、短期的な自己利益を優先する個人主義が極端化しています。未来への投資よりも現在の消費を、他者との協働よりも競争を、共通善の追求よりも私的利益の最大化を選ぶ傾向が強まっているのです。

AIの発達スピードは、私たちの社会制度、法的枠組み、そして何より私たち自身の理解と適応のスピードを大きく上回っています。そしてそのギャップは、分断された社会においては、さらに埋めることが困難になります。アテンションエコノミーが私たちの思考を断片化し、排外主義が協力の可能性を狭め、極端な個人主義が共通の課題への取り組みを困難にしている。いまだからこそ、長期的で包括的な視野を取り戻す必要があります。なぜなら、未来はすでに現在の延長線上で動き始めているからです。

本書は、未来への「処方箋」を提供するものではありません。むしろ、アテンションエコノミーによって細分化された私たちの思考を再統合し、分断された社会において対話の可能性を回復し、複雑で予測困難な時代において、私たち一人ひとりが「未来を考える力」を身につけるための手引きです。

重要なのは、未来についての選択は、最終的には私たち一人ひとりの思考と判断に委ねられているということ。しかし同時に、その思考を支える枠組みや道具を持たなければ、未来について考えることはひどく困難であることも事実です。「どのような未来が選択可能なのか」「どのような基準でそれらを評価すべきなのか」「現在の選択が長期的にどのような帰結をもたらすのか」——こうした問いに向き合うためには、単なる直感や感情を超えた、体系的な思考

の枠組みが必要なのです。

幸い、そうした枠組みは存在します。未来学が長年にわたって蓄積してきた知見、哲学者たちが練り上げてきた思想、そして実践者たちが現場で培ってきた手法——これらは、未来という茫漠ぼうぼくとした領域に挑むための、確かな足場を提供してくれます。私は本書において、加速主義から長期主義まで、対立するよう見えるさまざまな思想を並べて紹介し検討することで、読者の皆さんがいまの未来観を獲得し、それを足場にしながら相対化していくことによって、自分なりの未来観を形成することに寄与したいと考えています。